

## 長谷川博一先生のご逝去を悼む



長谷川博一先生は1991年10月30日午前2時、入院先の病院で肝不全のためお亡くなりになりました。享年65才でした。京都大学を退官された後、大阪産業大学において新たな使命感を傾注されている先生のご様子を拝見していた失先のこと、何とも言えない寂しさを禁じ得ません。

先生の病状がもはや後戻りのたいへん難しい状態であることを知ったのは、先生の娘さんからの電話でした。肝臓の本来の機能が弱まって血液自体が悪化したため、意識が薄れて危篤の状態にあるとのことでした。そのすこし前までは先生も病気については楽観的で、近いうちには大学にも出られると思っておられたようでしたのに、そしてその二日後に息を引き取られたのでした。

長谷川先生は昭和41年4月に京都大学理学部物理学教室に、宇宙線物理学講座担当の教授として着任されました。以来先生は、既成の伝統的な学問体系を常に一步踏みだして、新しい境界領域の分野を切り拓くことに特別の努力をされてきました。とりわけ物理学的な実験と理論の方法論に基づいて、どんなことであれ宇宙の基礎的な物理過程にかかわる問題に適用して新しい知見に到達することを目指すというのが、基本的な研究姿勢だったと思います。長谷川先生のもとでドクターを取っていった約30名の人たちに対しても、何が新しい方法なのか、どこが物理的に新しい知見かというふたつのポイントを明確に主張させた上で、如何に未知の領域に深く踏み込んだかという点を最も評価されていました。

京都大学に着任された後すぐに、世界的にもほとんど生まれただけの赤外線天文学という新領域の研究グループを育てるとい、当時としては大きな賭けかも知れない英断をされています。実際に英断であったということは、新しい宇宙の観測手法である赤外線天文学のその後の展開によって証明されてきているとも言えます。そしてそれ以後、長谷川先生ご自身天文学研究との深いつながりを続けてこられ、天文学が本当に必要とした開拓者の精神を私たちに教えてくれたのだと思っています。

宇宙固体科学という分野を日本に根付かせたのも長谷川先生の大きな業績です。研究室発足の当初、宇宙線の永年変化の研究のために採集された宇宙塵粒子の分析を始めました。その後太陽系内の惑星間塵の運動学的な振る舞いの研究、宇宙環境での固体微粒子生成過程の理論的研究、また固体同士の高速度衝突現象の実験的な研究など、宇宙固体科学の骨格となるサブテーマを次々と確立してこられました。これらの日本の研究に対しては外国からも高い評価を受けるようになり、1990年8月には長谷川先生を国内組織委員長とするIAUコロキウムが開かれています。残念ながら当時最初の入院そして手術の直後であったため、実際には会にはご出席戴きませんでした。

ご健康であれば、研究上では先生が直々に育ててこられた若い人々と共に進めている宇宙空間の環境下での固体微粒子生成の理論的な研究において、尚も指導的な役割を果たされることが期待されていましたが、勿論、京都産業大学の教養部長として私学教育の発展に対しても大きな牽引力を発揮しておられ、すでに大学全体の運営にとってもなくてはならない重責を担っておられたと聞いています。これから先生の双肩にかかるはずだった大きな荷物は、残された私達が引き継いで行かなければならない訳です。今は、ご指導を受けた広範囲にわたる研究者と大学および各方面の関係者共々、先生のご冥福を心からお祈り申し上げる次第です。

舞原俊憲（京大理）